

I 次の文章を読んで、後の問い（問1～12）に答えよ。（配点 75）

A

本来時間的な芸術であるブヨウが、日本文化のなかで、絵画的効果へ向う傾向があるとすれば、同じ文化の生みだした絵画が、時間の表現へ向うこともある。一般に絵画は、あたえられたある時点での対象——たとえば人物や風景や草花——の「イメージ」を写す。絵のなかでは人物が老いず、花が散らず、時が流れない。しかし例外的には、時間の経過とともに変化する対象を、絵画によって表現することがないわけではない。そのためにはいくつかの異なる手法がある。

第一、異時同図。同じ一つの画面のなかに異なる時点での出来事を描きこむ。

第二、異時図並列。異なる時点での出来事の絵を時間的順序に従って並列する。それぞれの絵は壁に掛けることもできるし、壁に直接に描くこともできる（壁画）。壁面の少ない日本の家屋では、壁面の代りに襖ふすまを用いることがある（襖絵）。また巻物に時の経過を追って異なる場面を描くこともできる（絵巻物）。

第一の手法（異時同図）が用いられた例は、日本では少ない。しかし少数例はあり、たとえば『古備大臣入唐絵巻』（一二世紀後半、ボストン美術館蔵）で、安倍仲麻呂の鬼が出現する場面。奈良時代に遣唐使として入唐した吉備真備よこべのまもひを、唐人たちは高い楼門の上に閉じこめ、『文選』の解説や碁の名人との勝負で試そうとする。そのとき安倍仲麻呂の鬼が現れて主人公を助け、主人公は難題に答え、碁に勝ち、唐人たちを圧倒する。絵巻では図の I に吹き荒れる風のなかの木立と、頭に角一本を生した裸の赤鬼が描かれ、II に朱塗りの高樓があつて、その上の室内に端坐した吉備真備と、今や衣冠をつけて官人の姿になり、窓際の回廊に近寄った鬼との対面が描かれている。鬼はまず風のなかに現れ、それから官人に化けて楼上に登ったはずだから、時間は一画面の右から左へ流れる。その過去（赤鬼の出現）と現在（対面）を一図のなかにまとめれば、画者の関係が明示される。III の現在から見て、IV は過去であり、現在の出来事の意味、すなわち主人公の対面する相手が鬼であることは、過去の場면을参照することによって確認される。V の現在から見れば VI は未来であり、現在の出来事の意味、すなわち鬼の出現の目的が主人公との対面であるということは、未来の出来事との関連において、またその関連においてのみ、あきらかになる。時間的に前後する二つの出来事を一つの画面に描きこむことの利点は、ここで十分に発揮されている。

西洋の中世絵画では、全く同じ手法がもつと頻繁に利用された。たとえば一五世紀中葉ジョヴァンニ・デイ・パオロの『天地創造と楽園追放』（一五世紀、メトロポリタン美術館蔵）では、左半分の上部に神、下部に同心円であらわされた世界が描かれ、右上部に林檎りんごの樹立ち、下部にアダムとエヴァを追いつ出す天使が描かれている。西洋では時間が左から右へ流れるから、まず天地創造があり、その後で神はみずから創った人間を、その冒した罪の故に、楽園から追いつ出すという話になる。罪（すなわち原罪）は、蛇に誘惑されて禁断の林檎を食べたことである。I、神は人間の創り方に失敗したのではないか、という疑問が当然生じるだろう。しかし神は自由意志を持った人間を創ったのであり、林檎を食べるか食べないかはその自由意志による選択だから、全知全能ではない人間が罪を選んだとしても、それは人間の責任で神の責任ではない。楽園追放とい

う出来事の意味は、単なる偶然でも、気まぐれな天使のいじめでもなくて、人間自身の罪の結果であり、罪が成立する条件は、第一に自由意志、第二に人間の不完全性である。その二つの条件が人間に備わっているということは、樂園追放がその時点でどれほど詳しく描かれていても理解できず、それより前に起こった出来事、すなわち天地創造の場面を参照することによってのみ理解できるのである。神は天地を創造し、神自身に似せて人間を創ったのだから、人間には自由意志がある。しかし人間は神と同じに創られたのではないから、不完全である。したがって自由意志による選択を誤り、罪を冒す。

このような創造者と被造物との関係は、もちろん、遣唐使の先輩と後輩の関係よりも複雑であり、はるかに普遍的な意味をもつ。また二つの場面を隔てる時間も、天地創造と樂園追放との間では、おそらく、鬼が現れてから楼上に登るまでの一刻よりも、長いはずであらう。しかし、^B同一画面のなかに前後する二つの出来事が描かれ、その一方が他方の意味を限定するという構造は、共通である。西洋の絵画と日本のそれとの大きなちがいは、西洋ではこのような異時同図の手法が多用されたのに対し、日本では比較的その用例が少ないということである。その背景には、おそらく、現在の出来事の意味を、過去または未来の出来事との関連のなかに見ようとする傾向が、一方では強く、他方では弱いということがあるにちがいない。

二つの出来事が前後して起こった場合ではなく、多数の出来事の前後関係、たとえば戦争の経過や主人公の生涯を通して流れる長い時間を、絵画的に表現するためには、どういう手法を用いるか。西洋絵画では、その場合にも異時同図を用いるか、時を異にする出来事をフレスコやモザイクで同一の枠内（たとえば天上や壁面）に収めるか、額縁の画面を同じ室内にならべて容易に見渡せるようにするか、——いずれにしても多くの場面を見渡せるように工夫することが多い。もともと典型的にはキリストの生涯であらう。「誕生」から「十字架の道」や「磔^{なげ}刑」を通じて、「復活」まで。それを見渡すことによって、眼前の一場面を、過去および未来の場面と関係づけ、その意味を理解することができる。キリスト磔刑の意味は、ゴルゴタの丘の場面だけでは理解できず、「誕生」以来の過去と「復活」の未来とを参照することによってのみ決まるのである。

日本では一二世紀後半から絵巻物が発達した。幅の狭い長い巻紙の右から左へ、原則として時間の順序に従い、物語や合戦の成り行き、寺社の縁⁶起や高僧の行跡のしかるべき場面を描く。場面はそれぞれ独立していて連続しない（出来事の時だけではなく、所もちがひ、人物もちがうことが多い）。場面と場面との間に文字による説明を挿^はむこともある。絵の技法と様式には主として二種類を区別することができる。一つは《源氏物語絵巻》（一二世紀前半）に典型的なように、墨の下絵に濃い絵具を塗り、その上に引目^{かき}鉤鼻などの細部を細い墨の線で描き入れるもので、「つくり絵」、または「女絵」という。もう一つは墨の描線を主とし、人物の表情や姿勢、動作などの戯画的な写真に優れ、淡彩を加えたもので、「男絵」という。《信貴山縁起》（一二世紀後半）はその代表的な作品である。しかしこの二つの様式の区別⁶はベンギ的なもので、「女絵」の色彩と「男絵」の粗描とを兼ね備えた作例も多い。そのケツサクは《伴大納言絵巻》（一二世紀後半）や《吉備大臣入唐絵巻》（同上）である。また時代は下るが、《一遍上人絵伝》（一二世紀末）も、「女絵」と「男絵」との区別を超えて、社寺の景観や自然の風景、また社会の広汎な階層に及ぶ風俗を、写実的に描く。

絵巻物は一場面を広げて見、見終った絵を巻いて、次の場面を広げるといった操作をくり返しなが

ら眺めるように出来ている。右手にはすでに見た部分が巻かれ、左手には未だ見ていない部分が巻かれていて、どちらも現在眼前にある場面とともに見ることはできない。現在は過去からも未来からも切り離されている。時間は過去から未来へ向って流れていて、^Dそこにはいくらかの記憶と予感はあるが、現在の出来事の参照基準として、過去や未来があるのではない。^E絵巻物の時間は、等価的に並ぶ現在の連鎖である。われわれは次から次へ場面を広げて見るので、場面の連鎖の全体を見渡して場面相互の関連を確認することはない。それぞれの場面は、自己完結的で、前後の出来事に係わらず、その線や色彩、群集の動きや風景のジヨウチヨ^dがそれ自身として訴える。たとえば応天門の火事。われわれの眼の前には画面全体をおおって渦巻く^d火焰のすさまじい迫力がある。たしかに火事が伴大納言の指図によつて起こったという情報は、前後の場面を見なければわからないが、その情報は炎の色彩のほとんど「フォーヴァ」的な迫力には何らの影響を及ぼさない。またたとえば熊野の山々と寺院配置についての情報は、それを描いた《一遍上人絵伝》の一場面において完結して、他の場面とは関係がない。絵巻物は時間を構造化するのではなく、あたえられた任意の時点（における世界）の **甲** 性を強調するのである。ここでは人が現在に生きる。

日本の絵巻物は中国の画卷の影響の下に始まったとされる。現存する最古の絵巻は、《絵因果経》（八世紀後半）で、中国から輸入された画卷を模して写経所の画師が作ったという。その後平安時代に「日本化」がおこり、技術が洗練されて、一二世紀以後には大いに流行した。記録に残る作例が四〇〇種以上、現存するものが百数十種ある。西洋には絵巻と称すべきものがほとんどないから、^F絵巻物の背景に日本文化のある種の特徴を想像することができる。時間の絵画的表現の日本における主要な手段は、絵巻物であり、絵巻物は現在を過去および未来から切離して独立に完成しようとする強い傾向をもつ。すなわち^eシイカにおいても、音楽においても、著しい「今」の強調が、別の言葉で言えば全体よりも「部分」への強い関心が、絵画の場合にもあらわれているのである。

（加藤周一『日本文化における時間と空間』、岩波書店、2007年）

問1 傍線部 a ～ e のカタカナを漢字に直せ。解答は解答题の所定欄に読みやすいはつぎりした楷書体で書くこと。解答番号は **1** 、 **5** 。

a ブヨウ

1

b ベンギ

2

c ケツサク

3

d ジョウチヨ

4

e シイカ

5

問 2 空欄 **I** 、 **VI** に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の

①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は **6**。

- ① I－左手 II－右手 III－左手 IV－右手 V－左手 VI－右手
- ② I－左手 II－右手 III－左手 IV－右手 V－右手 VI－左手
- ③ I－左手 II－右手 III－右手 IV－左手 V－左手 VI－右手
- ④ I－左手 II－右手 III－右手 IV－左手 V－右手 VI－左手
- ⑤ I－右手 II－左手 III－右手 IV－左手 V－右手 VI－左手
- ⑥ I－右手 II－左手 III－右手 IV－左手 V－左手 VI－右手
- ⑦ I－右手 II－左手 III－左手 IV－右手 V－右手 VI－左手
- ⑧ I－右手 II－左手 III－左手 IV－右手 V－左手 VI－右手

問 3 空欄 **甲** に入る語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解

答番号は **7**。

- ① 場面連鎖 ② 首尾一貫 ③ 多種多様
- ④ 自己完結 ⑤ 文脈依存 ⑥ 時間等価

問 4 空欄 **イ** に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから

一つ選べ。解答番号は **8**。

- ① なぜ全知全能の神が罪を冒すような人間を創ったのか
- ② なぜ全知全能の神が自由な人間を蛇に誘惑させたのか
- ③ なぜ全知全能の神が不完全な人間に罪を冒させたのか
- ④ なぜ全知全能の神が罪な人間を樂園から追放したのか
- ⑤ なぜ全知全能の神が人間を創る際に自分に似せたのか
- ⑥ なぜ全知全能の神が「原罪」というものを創ったのか

問 5 傍線部 A 「全く同じ手法」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 異なる時点での出来事の絵を時間的順序に従って複数の画面のなかに描きこむ手法
- ② 異なる時点での出来事の絵を時間的順序に従って同一画面の上から下に描く手法
- ③ 異なる時点での出来事の絵を時間的順序に従って同一画面の右から左に描く手法
- ④ 異なる時点での出来事の絵を時間的順序に従って同一画面の左上から右下に描く手法
- ⑤ 異なる時点での出来事の絵を時間的順序とは反対に複数の画面のなかに描き込む手法
- ⑥ 異なる時点での出来事の絵を同じ一つの画面のなかに描きこむ手法

問 6 傍線部 B 「同一画面のなかに前後する二つの出来事が描かれ、その一方が他方の意味を限定するという構造」の例として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 《キリストの生涯》ではキリストの「復活」の左に「磔刑」が描かれている
- ② 《天地創造と楽園追放》では「楽園追放」の右に神と同心円の世界が描かれている
- ③ 《一遍上人絵伝》では熊野の山々の横に一遍上人の姿が描かれている
- ④ 《伴大納言絵巻》では応天門の火事の右に火事を指図する伴大納言の様子が描かれている
- ⑤ 《吉備大臣入唐絵巻》では吉備真備と鬼との対面の場面の横に木立と赤鬼が描かれている
- ⑥ 《源氏物語絵巻》では浮舟の隠れ家を訪れる薫の右に囲碁をする帝と薫が描かれている

問 7 傍線部 C 「縁起」の意味として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 不吉な事柄
- ② 昔から伝わる行事
- ③ 起源・由来や靈験の言い伝え
- ④ 物事の前ぶれ
- ⑤ 宗教的な効果
- ⑥ 宗教上の特性

問 8 傍線部 D 「そこ」の指示する内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 絵巻物
- ② 絵巻物の時間
- ③ 絵巻物のすでに見た部分
- ④ 絵巻物の未だ見ていない部分
- ⑤ 絵巻物の現在眼前にある場面

問 9 傍線部 E 「絵巻物の時間は、等価的に並ぶ現在の連鎖である」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 絵巻物においては、現在の出来事を参照基準として、過去や未来があるのではなく、過去と未来が相互に等しい価値を持っているということ。
- ② 絵巻物においては、現在は過去からも未来からも切り離されており、それ自体が自己完結したものとして描かれているということ。
- ③ 絵巻物においては、それぞれの場面が自己完結的になっており、過去・現在・未来がつながっているようであっても関係性を持たないということ。
- ④ 絵巻物においては、過去・現在・未来といった場面の連鎖の全体を見渡す必要はなく、それぞれの場面を個別に鑑賞すべきであるということ。
- ⑤ 絵巻物においては、前後の場面を見なくとも、各場面が自己完結したものとして、等しく情報が伝わるように描かれているということ。
- ⑥ 絵巻物においては、個々の場面が一卷全体の中で同一の芸術的価値を有しており、場面相互の関連を確認する必要がないように描かれているということ。

問10 傍線部F「日本文化のある種の特徴」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 日本文化においては、芸術的価値の観点から、過去や未来よりも現在が重んじられているということ。
- ② 日本文化においては、著しい「今」の強調が見られ、これが過去と未来の軽視につながっているということ。
- ③ 日本文化においては、過去・未来から切り離すことで現在に芸術的価値を付加しているということ。
- ④ 日本文化においては、現在を過去および未来から切り離して独立させることにより、西洋にない独自の価値観を築いたということ。
- ⑤ 日本文化においては、過去・現在・未来を個別に取り扱うことが重視されており、西洋文化と比べても独特な表現法を有しているということ。
- ⑥ 日本文化においては、全体的な時間の流れそのものよりも現在に対する強い関心が現れているということ。

問11 空欄 ア に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 日本文化における「部分」
- ② 日本文化における「今」
- ③ 日本文化の首尾一貫性
- ④ 日本文化の表現手法
- ⑤ 芸術における連続性
- ⑥ 芸術における絵画的効果
- ⑦ 絵画のなかの時間
- ⑧ 絵画手法に見る和洋の違い

問12 本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ選べ。ただし、完答しなければ加算しない。解答は解答番号 16 の二ヶ所にマークすること。

- ① 日本の絵画においては、与えられたある時点での対象を写すのが一般的であり、時間の経過とともに変化する対象を取り上げることはないため、同一絵画の中で人物が年を取ること
はあり得ない。
- ② 西洋絵画においては、同じ一つの画面のなかに異なる時点での出来事を描き込む異時同図
の手法が一般的であり、異なる時点での出来事の絵を時間的順序に従って並列する異時図並
列の手法はほとんど採られることがなかった。
- ③ 同一画面のなかに前後する二つの出来事を描く異時図並列の手法は西洋でも日本でも絵画
の手法として使われてきたが、西洋と比べると日本ではあまり採用されておらず、《吉備大
臣入唐絵巻》などの少ない作品でしか確認できない。
- ④ 幅の狭い長い巻紙の右から左へと場面を描いていく日本の絵巻物は、中国の画卷の影響の
下に始まったとされており、物語や合戦の成り行き、寺社の縁起や高僧の行跡を原則として
時間の順序に沿って描いていく。
- ⑤ 西洋の中世絵画では、異時同図の手法が日本よりも頻繁に用いられ、アダムとエヴァを追
い出す天使を右に、全知全能の神を左に描いたジヨヴァンニ・デイ・パオロの《天地創造と
樂園追放》という作品はその一例である。
- ⑥ 異時同図の手法が日本の絵画ではあまり見られず、逆に西洋絵画で多く見られるのは、現
在の出来事を過去あるいは未来との関連のなかに見ようとする傾向が日本では強く、西洋で
は弱いのだと考えられる。
- ⑦ 絵巻物の世界では時間的連鎖を超越した現在が過去や未来よりも絶対的な意味を持つてお
り、自己完結した場面としての迫力も有しているため、前後の場面を見なくとも見る者に物
語りの概要が伝わる構成になっている。
- ⑧ 「誕生」から「復活」までキリストの生涯を描いた西洋絵画では、「誕生」以来の過去と
「復活」の未来とを参照することによってはじめて「磔刑」が意味を持つのであり、ゴルゴ
タの丘の場面それ自体には芸術的価値はない。
- ⑨ 西洋では《天地創造と樂園追放》に確認できるように異時同図の手法が多用されているの
に対して、絵巻と称すべきものはほとんどなく、日本の《伴大納言絵巻》のような絵巻物に
見られる異時図並列の手法は使われていない。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問い（問 1 ～ 11）に答えよ。（配点 75）

人はしばしば次のように考える——数学と違って経験を通して検証可能な自然諸科学には「不完全性」のようなことはない。数学理論は究極的には、その数学という手順だけでは確認しようのないコウリ系（ないし諸原理）に依存するが、自然科学理論ではその理論の諸原理は経験と照らし合わせるができるのだから。^aこのような考えは正しいのであろうか？ 実は有力な反論が可能である。

数学や自然科学には後世に大きな影響を及ぼした論文や著書が少なからずある。ゲーデルの不完全性定理に関する一九三一年の論考などその最たるものであろう。哲学にもそれに類する論文がある。戦後アメリカの代表的哲学者でハーヴァード大学のクワインが一九五一年に発表した「経験主義の二つのドグマ」（雑誌『哲学評論』に掲載）がそうだった。その論文は、「分析的真理」すなわち **I** に基づく判断にかかわりなく真なる言明と、「総合的真理」すなわち **I** に基づかなければ真偽が判定できない **Ⅱ** とが截然と分離できるとする **Ⅲ**、および「還元主義」すなわち意味のある言明はすべて直接的に経験されることがらに還元できるという **Ⅲ** をドグマ（根拠のない独断的憶測）として退ける内容をもっていた。これら二つの **Ⅲ** はそれまで経験主義を支持する者たちによつてあまりにも当然のこととして信奉されていたため、論文は衝撃として受けとめられた。

今日「デユエム・クワイン説」の名称で科学哲学の**b**スウヨウな学説と見なされている考えが世に知られるようになったのは、この「経験主義の二つのドグマ」を介してなのである。クワインはその中で、「外的世界についてのわれわれの言明は、個々独立にではなく、一つの集合体としてのみ感覚的経験の裁きに直面する」、^cカンゲンすれば、自然科学理論の個々の言明の妥当性は、別々には判定できず、理論全体として初めて判断される、と主張し、そして一九五三年にその論文を論文集『論理的観点から』に収録する際、そこに註を付し、ピエール・デユエムの『物理学理論——その目的と構造』（一九〇六年）の「物理学理論と実験」と題された章の参照を求めている。ここでの「実験」は経験の一種と解釈してよい。

クワインが参照を求めていた個所で、デユエムは自然科学のある仮説についての判定実験が **ア** と論じていた。すなわち、ある仮説の妥当性を実験的に検証しようとしても、その実験だけでは真偽の判定にとつて不ジユウゼンであると主張していたのである。デユエムはこのことを示すために、実験科学においては、数学の帰謬法のような論法は使えないという論拠にたよった。数学にはある仮説の正しさを証明するために、いったんその仮説を否定して議論を展開し、そこから矛盾が導きだせれば、元の仮説が正しいとしてよいという論証手順がある。これが帰謬法の原理である。だが、実験を探究の手段とする自然科学では、このような論法は使用できない。なぜなら、ある判定実験を試み、予期した結果が得られない場合、その実験がわれわれに教える唯一のことは、予測した現象が生じないということを検証するのに役立った「**イ**」である。しかし、その誤謬がどこで生じるのかということ、このことを実験はわれわれに告げはしない。「予想された現象が生じない場合、誤りがあるとされるのは、目下問題になっている命題だけでなく、物理学者が使った理論的足場全体なのである」。数学では、

たいていの場合、誤りの根源を一本道を遡及しなおしてつきとめることができるが、自然科学では、たどりなおす道は多様であり、一本道ではないので、このようなことはできないというのである。

ここからクワインの「^B経験的な有意味性の単位は科学の全体である」という主張が容易に出てくる。

ただし、デュームはこの時点で物理学者が途方に暮れねばならないと言っているわけではない。彼は頑固な懐疑主義的科学哲学者ではなく、健全な物理学者であり、物理学史家であった。たとえば、光の本性に関しては、粒子説と波動説が対立しているが、それらの理論の妥当性は、個々の実験（クワインの言葉では「感覚的経験の裁き」）によつては、検証も反証もされず、歴史的探究から得られる総合的「良識」のみがいずれの理論が支持されるべきかの判断を行うというのである。デュームは粒子説でも波動説でもない、しかも粒子説をも波動説をも満足させうるアインシュタインの光量子説をいまだ知らなかった。もし知っていたとしたら、彼の「良識」のレベルも一段高い段階に達したに相違ない。

「デューム・クワイン説」が^eガンイする、経験的言明を個々に重ねていつてもそれだけでは自然科学の真理性は決定できないという主張は、今日では「決定不全性」(underdetermination)という術語で表現される。数学理論の「不完全性」(incompleteness)とは違った、自然科学の真理性の臨界点を言い表した概念であると言つてよい。

なぜデュームは自然科学理論の「決定不全性」といつた概念を彼の著書で打ち出すことができたのであろうか。「デューム・クワイン説」のような知見を二十世紀の科学哲学の最高の発見であるかのように喧伝^{けん}している論者に出会うと、多少啞然^{おぼろ}とさせられる。実は、先に触れた数学理論のある意味での「不完全性」が古代・中世の多少ともまともな哲学者にとつて「常識」であつたように、自然科学理論の「決定不全性」のようなことも彼らにとつては「常識」も同然であつた。この事情を見てみよう。

ジャンバッティスタ・ヴィーコは一七〇八年、ナポリ大学で「われらの時代の学問方法について」と題する講演を試み、翌年改訂のうえ著書の形で公刊した（岩波文庫『学問の方法』）。彼はその中で、自然学の探究における数学的方法の「**甲**」について議論している。「われわれが幾何学的ことがらを証明するのは、われわれがそれらを作っているからである。もしかりに、われわれが自然学的ことがらを証明できるとしたら、われわれはそれらを作っていることになってしまうであろう」。ここで「幾何学的」とは「数学的」と同義である。私たちは数学的対象を「作る」、すなわち頭に自由に思い描き、操作することができる。それゆゑ証明することができる。が、自然学の対象、すなわち自然はそうではない。それを人間は作れない。神の存在を信する人なら、神のみが自然を創造できる、作れると主張するであろうが。被造物である人間はただ自然の形を変えてやれるだけにすぎず、そのことをもつて自然を作れると錯覚しているのである。ヴィーコのこの認識の根底には、「真なるもの」と「作られたもの」は同等であるという真理規準が存在している。カンテンすれば、真理とはそれを作りうる程度にまで知っていることがらを指すのである。数学的自然学はたんに「真らしいもの」の認識なのであり、真理自体をとらえているわけではないのである。

ヴィーコのこの考えは、現代ドイツの哲学者カール・フオン・ヴァイツゼッカーの自然科学についての言明「**ウ**」と共通するものであろう。

ところで、多少とも西洋の古代・中世哲学に通じている者は、ヴィーコの真理規準がそれほど独

創的なものではないことに気づいているはずである。そうして、古代で最大の哲学者であったアリストテレスをソウキするだろう。アリストテレスは『形而上学』の中でこう述べていた。「数学的確美性は、あらゆる対象について要求されるべきではなく、ただ質料をグエウしないものの場合のみ要求されるべきである。まさにそれゆえに、この数学の方法は自然学の方法ではない、そのわけは、おそらく、およそ自然は、すべて質料をグエウしているからである」。「質料」(ヒューレ)とは物質のことである。この言明は、自然は数学的構造をもっていると信じたガリレオからハイゼンベルクまでの科学者たちが活躍した近代という時代に生きる者には、皮肉にも、きわめて新鮮に響く。アリストテレスによれば、「質料」とは「それ自体はとくになんであるとも言われず、どれほどの量であるとも言われず、その他、もののあり方が規定されるものどものいずれによつても言い表されえないあるもの」をいう。彼は自然的存在は必ず「質料」をもつと考えた。アリストテレス哲学の重要な貢献の少なくとも一つは、このヒューレ概念の発見にある。

それでは——と、さらにアリストテレスは問いかける—— **エ** だれなのか？ その人の師であるソクラテスは、普遍的な諸概念が感覚的で個別的なものごとから離れて存在するとは考えなかった。「しかるに、あの人々は、それらを切り離した、そしてそのように離れて存在するものどもをアイデアと呼んだ」。「あの人々」とは、アリストテレスの師であったプラトンとその徒のことである。アイデア(形相、理念)こそ実在であり、この世の感覚的で個別のものごとはその陰影であるとするプラトンのアイデア論のごときは、アリストテレスにとっては、

乙 のドグマでしかない(ハロルド・チャーニス『アリストテレスによるプラトンとアカデメイアの批判』一九四四年)。アリストテレスのプラトン批判は、たんなる社会的関係性でしかないものを実体的存在と見る「物神崇拜」ないし「物象化」を批判してみせたマルクスの観点に似ている。この類似は **丙** ではない。マルクスが近代の思想家で師と崇めていたのがヘーゲルであったとすれば、古代の哲学者で最も尊敬していたのはアリストテレスであったからである。

自然科学の「決定不全性」といった概念はそれほど新規なものではない。むしろ近代における数学的自然学への熱狂と、根拠がないわけではないその成功のめざましさが、そういった考えを忘れさせていただけなのかもしれない。判定実験の意義と限界性を明確に指摘しえたデユエムがアリストテレス主義の信奉者だったのは、この観点から見ると、決して不思議ではない。彼は、アリストテレス主義が常識であった中世ラテン・キリスト教世界の科学史研究のパイオニアであり、そして、数学のたぐい稀な才能の持ち主ブレーズ・パスカルの信奉者でもあったのである。

(佐々木力『科学論入門』、岩波書店、1996年)

問 1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはっきりした楷書体で書くこと。解答番号は 17 ～ 23。

a コウリ

17

b スウヨウ

18

c カンゲン

19

d ジュウゼン

20

e ガンイ

21

f ソウキ

22

g グユウ

23

問 2 空欄 Ⅰ ～ Ⅲ に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 24。

① Ⅰ－真理 Ⅱ－事実 Ⅲ－信念

② Ⅰ－真理 Ⅱ－信念 Ⅲ－事実

③ Ⅰ－事実 Ⅱ－真理 Ⅲ－信念

④ Ⅰ－事実 Ⅱ－信念 Ⅲ－真理

⑤ Ⅰ－信念 Ⅱ－真理 Ⅲ－事実

⑥ Ⅰ－信念 Ⅱ－事実 Ⅲ－真理

問 3 空欄 甲 ・ 乙 ・ 丙 に入る語として最も適当なものを、次の語群のうちからそれぞれ一つずつ選べ。空欄甲の解答番号は 25、空欄乙の解答番号は 26、空欄丙の解答番号は 27。

- | | | | |
|---|--------|--------|--------|
| 甲 | ① 類似性 | ② 客観性 | ③ 効率性 |
| | ④ 親和性 | ⑤ 限界性 | ⑥ 真理性 |
| 乙 | ① 枝葉末節 | ② 金科玉条 | ③ 傍若無人 |
| | ④ 本末転倒 | ⑤ 一知半解 | ⑥ 同工異曲 |
| 丙 | ① 必然 | ② 当然 | ③ 偶然 |
| | ④ 自然 | ⑤ 蓋然 | ⑥ 瞭然 |

問 4 空欄 ア に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

- ① 実証的にその仮説の真偽を決定することは必要である
- ② 感覚的にその仮説の真偽を決定することは本質ではない
- ③ 数学的にその仮説の真偽を決定することは当然である
- ④ 一義的にその仮説の真偽を決定することは必ずしもできない
- ⑤ 論理的にその仮説の真偽を決定することは可能である
- ⑥ 経験的にその仮説の真偽を決定することは有効とはいえない

問 5 空欄 イ に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 唯一の命題の中に少なくとも一つの誤謬があるということ
- ② 唯一の命題の中にあらゆる誤謬があるということ
- ③ 少なからぬ命題の中にあらゆる誤謬があるということ
- ④ 少なからぬ命題の中に唯一の誤謬があるということ
- ⑤ あらゆる命題の中に唯一の誤謬があるということ
- ⑥ あらゆる命題の中に少なくとも一つの誤謬があるということ

問 6 空欄

ウ

 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

30

。

- ① 自然は人間よりも広い。そして人間は自然科学よりも広い
- ② 自然は人間よりも古い。そして人間は自然科学よりも古い
- ③ 自然は人間よりも浅い。そして人間は自然科学よりも浅い
- ④ 自然は人間よりも賢い。そして人間は自然科学よりも賢い
- ⑤ 自然は人間よりも偉い。そして人間は自然科学よりも偉い
- ⑥ 自然は人間よりも尊い。そして人間は自然科学よりも尊い

問 7 空欄

エ

 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

31

。

- ① 数学的方法による自然認識の確実性は不明であると表明したのは
- ② 数学的方法による普遍的諸概念は不要であると主張したのは
- ③ 自然認識における普遍的概念を曖昧に位置づけてしまったのは
- ④ 自然認識における数学的方法を不当に強調しすぎたのは
- ⑤ 普遍的諸概念に基づく自然認識に適正な価値基準を与えたのは
- ⑥ 普遍的諸概念に反した数学的方法に誤った存在価値を認めたのは

問 8 傍線部 A 「このような考え」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 数学理論は経験による検証を必要としない究極の合理的諸原理に依存するため「不完全性」を払拭できるが、自然科学理論は論証の手順に経験を必要とするため「不完全性」を払拭できない。
- ② 数学理論は経験による検証を必要としない究極の合理的諸原理に依存しないため「不完全性」を払拭できないが、自然科学理論は論証の手順に経験を必要とするため「不完全性」を払拭できる。
- ③ 数学理論は経験を通して検証可能な究極的諸原理に依存するため「不完全性」を払拭できないが、自然科学理論は諸原理を経験と照らし合わせることができるため「不完全性」を払拭できる。
- ④ 数学理論は経験を通して検証可能な究極的諸原理に依存しないため「不完全性」を払拭できるが、自然科学理論は諸原理を経験と照らし合わせることができるため「不完全性」を払拭できない。
- ⑤ 数学理論は数学独自の論証手順によって確認できない諸原理に依存するため「不完全性」を払拭できないが、自然科学理論は経験を通して諸原理を検証可能であるため「不完全性」を払拭できる。
- ⑥ 数学理論は数学独自の論証手順によって確認できない諸原理に依存しないため「不完全性」を払拭できるが、自然科学理論は経験を通して諸原理を検証可能であるため「不完全性」を払拭できない。

問 9 傍線部 B 「経験的な意味性の単位は科学の全体である」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 自然科学理論は理論全体として初めてその妥当性が判断されるのであり、個別の経験的言明を積み重ねることは理論全体の妥当性を保証することになる。
- ② 実験を通してある仮説の妥当性を検証しようとする場合、科学で用いられる単位には全体的な統一基準を設ける必要がある。
- ③ ある判定実験において予想された現象が生じない場合であっても、検証にかかわる論理の単位は当該命題の全体に適応する必要はない。
- ④ 経験的言明を個々に重ねるだけでは自然科学の真理性は決定できないのであり、その妥当性は理論全体として初めて判断される。
- ⑤ 数学的自然認識は自然を作りうる程度にまで知っていることを科学の単位とするのであり、「真なるもの」と「作られたもの」の意味性は同等である。
- ⑥ 数学的確実性はあらゆる対象について要求されるべきではなく、自然の中の質料を単位として全体性の意味が認識される。

問10 傍線部C「多少啞然とさせられる」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 自然科学の「決定不全性」はそれほど新規な考えとはいえないから。
- ② 数学の「不完全性」の方がそれ以上に独創的な考えであるから。
- ③ 自然科学の「決定不全性」は古代・中世の哲学の必要条件であったから。
- ④ 数学の「不完全性」の方が哲学者には一層衝撃を与えたから。
- ⑤ 自然科学の「決定不全性」は十八世紀の発見であったから。
- ⑥ 数学の「不完全性」の方が二十世紀の最高の発見であったから。

問11 本文の内容に合致しないものを、次の①～⑨のうちから二つ選べ。ただし、完答しなければ加點しない。解答は解答番号 35 の二ヶ所にマークすること。

- ① 経験主義における一つのドグマを論じたクワインによれば、外的世界は一つの集合体としての感覚的経験に基づいて検証されなければならない。
- ② ある仮説をいったん否定して議論を展開することで矛盾が導きだせれば元の仮説は正しいとする実験科学の論証手順は、デユエムによれば自然科学では有効ではない。
- ③ 歴史的探究によって得られる総合的「良識」のみが自然科学理論の妥当性を判断し、個別の実験は理論のそれを確定しないとデユエムは主張する。
- ④ 数学理論が証明可能なのは数学的方法がわれわれに「作られたもの」だからであり、数学的方法による自然の探究も同等に「真なるもの」であるとヴァイコは主張する。
- ⑤ 自然の解明に数学的方法を用いる妥当性をアリストテレスは否定したが、近代の科学者は質料の数学的特性にもとづいて自然の数学的構造を究明しようとした。
- ⑥ 普遍的な諸概念は感覚的で個別的なものごとから切り離して存在できるとプラトンは考えたが、ソクラテスはそれらを切り離すことはできないと考えた。
- ⑦ この世の感覚的で個別的なものごとを、イデアとしての実在から切り離したプラトンのイデア論は、その弟子であるアリストテレスによって批判された。
- ⑧ 単なる社会的関係性を実体的存在と見なす「物象化」を批判したマルクスの観点は、アリストテレスがプラトンのイデア論を批判したことと無関係ではない。
- ⑨ 中世ラテン・キリスト教世界の科学史を研究したデユエムはアリストテレス主義にも通じており、自然科学における判定実験の意義と限界性を明確に指摘した。

問 3 空欄 甲 ・ 乙 ・ 丙 に入る語として最も適当なものを、次の語群のうちからそれぞれ一つずつ選べ。空欄甲の解答番号は 25、空欄乙の解答番号は 26、空欄丙の解答番号は 27。

- | | | | |
|---|--------|--------|--------|
| 甲 | ① 類似性 | ② 客観性 | ③ 効率性 |
| | ④ 親和性 | ⑤ 限界性 | ⑥ 真理性 |
| 乙 | ① 枝葉末節 | ② 金科玉条 | ③ 傍若無人 |
| | ④ 本末転倒 | ⑤ 一知半解 | ⑥ 同工異曲 |
| 丙 | ① 必然 | ② 当然 | ③ 偶然 |
| | ④ 自然 | ⑤ 蓋然 | ⑥ 瞭然 |

問 4 空欄 ア に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

- ① 実証的にその仮説の真偽を決定することは必要である
- ② 感覚的にその仮説の真偽を決定することは本質ではない
- ③ 数学的にその仮説の真偽を決定することは当然である
- ④ 一義的にその仮説の真偽を決定することは必ずしもできない
- ⑤ 論理的にその仮説の真偽を決定することは可能である
- ⑥ 経験的にその仮説の真偽を決定することは有効とはいえない

問 5 空欄 イ に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 唯一の命題の中に少なくとも一つの誤謬があるということ
- ② 唯一の命題の中にあらゆる誤謬があるということ
- ③ 少なからぬ命題の中にあらゆる誤謬があるということ
- ④ 少なからぬ命題の中に唯一の誤謬があるということ
- ⑤ あらゆる命題の中に唯一の誤謬があるということ
- ⑥ あらゆる命題の中に少なくとも一つの誤謬があるということ

問 6 空欄

ウ

 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

30

。

- ① 自然は人間よりも広い。そして人間は自然科学よりも広い
- ② 自然は人間よりも古い。そして人間は自然科学よりも古い
- ③ 自然は人間よりも浅い。そして人間は自然科学よりも浅い
- ④ 自然は人間よりも賢い。そして人間は自然科学よりも賢い
- ⑤ 自然は人間よりも偉い。そして人間は自然科学よりも偉い
- ⑥ 自然は人間よりも尊い。そして人間は自然科学よりも尊い

問 7 空欄

エ

 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

31

。

- ① 数学的方法による自然認識の確実性は不明であると表明したのは
- ② 数学的方法による普遍的諸概念は不要であると主張したのは
- ③ 自然認識における普遍的概念を曖昧に位置づけてしまったのは
- ④ 自然認識における数学的方法を不当に強調しすぎたのは
- ⑤ 普遍的諸概念に基づく自然認識に適正な価値基準を与えたのは
- ⑥ 普遍的諸概念に反した数学的方法に誤った存在価値を認めたのは

問 8 傍線部 A 「このような考え」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 数学理論は経験による検証を必要としない究極の合理的諸原理に依存するため「不完全性」を払拭できるが、自然科学理論は論証の手順に経験を必要とするため「不完全性」を払拭できない。
- ② 数学理論は経験による検証を必要としない究極の合理的諸原理に依存しないため「不完全性」を払拭できないが、自然科学理論は論証の手順に経験を必要とするため「不完全性」を払拭できる。
- ③ 数学理論は経験を通して検証可能な究極的諸原理に依存するため「不完全性」を払拭できないが、自然科学理論は諸原理を経験と照らし合わせることができるため「不完全性」を払拭できる。
- ④ 数学理論は経験を通して検証可能な究極的諸原理に依存しないため「不完全性」を払拭できるが、自然科学理論は諸原理を経験と照らし合わせることができるため「不完全性」を払拭できない。
- ⑤ 数学理論は数学独自の論証手順によって確認できない諸原理に依存するため「不完全性」を払拭できないが、自然科学理論は経験を通して諸原理を検証可能であるため「不完全性」を払拭できる。
- ⑥ 数学理論は数学独自の論証手順によって確認できない諸原理に依存しないため「不完全性」を払拭できるが、自然科学理論は経験を通して諸原理を検証可能であるため「不完全性」を払拭できない。

問 9 傍線部 B 「経験的な有意味性の単位は科学の全体である」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 自然科学理論は理論全体として初めてその妥当性が判断されるのであり、個別の経験的言明を積み重ねることは理論全体の妥当性を保証することになる。
- ② 実験を通してある仮説の妥当性を検証しようとする場合、科学で用いられる単位には全体的な統一基準を設ける必要がある。
- ③ ある判定実験において予想された現象が生じない場合であっても、検証にかかわる論理の単位は当該命題の全体に適応する必要はない。
- ④ 経験的言明を個々に重ねるだけでは自然科学の真理性は決定できないのであり、その妥当性は理論全体として初めて判断される。
- ⑤ 数学的自然認識は自然を作りうる程度にまで知っていることを科学の単位とするのであり、「真なるもの」と「作られたもの」の意味性は同等である。
- ⑥ 数学的現実性はあらゆる対象について要求されるべきではなく、自然の中の質料を単位として全体性の意味が認識される。

問10 傍線部C「多少啞然とさせられる」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 自然科学の「決定不全性」はそれほど新規な考えとはいえないから。
- ② 数学の「不完全性」の方がそれ以上に独創的な考えであるから。
- ③ 自然科学の「決定不全性」は古代・中世の哲学の必要条件であったから。
- ④ 数学の「不完全性」の方が哲学者には一層衝撃を与えたから。
- ⑤ 自然科学の「決定不全性」は十八世紀の発見であったから。
- ⑥ 数学の「不完全性」の方が二十世紀の最高の発見であったから。

問11 本文の内容に合致しないものを、次の①～⑨のうちから二つ選べ。ただし、完答しなければ加点しない。解答は解答番号 35 の二ヶ所にマークすること。

- ① 経験主義における二つのドグマを論じたクワインによれば、外的世界は一つの集合体としての感覚的経験に基づいて検証されなければならない。
- ② ある仮説をいったん否定して議論を展開することで矛盾が導きだせれば元の仮説は正しいとする実験科学の論証手順は、デユエムによれば自然科学では有効ではない。
- ③ 歴史的探究によって得られる総合的「良識」のみが自然科学理論の妥当性を判断し、個別の実験は理論のそれを確定しないとデユエムは主張する。
- ④ 数学理論が証明可能なのは数学的方法がわれわれに「作られたもの」だからであり、数学的方法による自然の探究も同等に「真なるもの」であるとヴァーコは主張する。
- ⑤ 自然の解明に数学的方法を用いる妥当性をアリストテレスは否定したが、近代の科学者は質料の数学的特性にもとづいて自然の数学的構造を究明しようとした。
- ⑥ 普遍的な諸概念は感覚的で個別的なものごとから切り離して存在できるとプラトンは考えたが、ソクラテスはそれらを切り離すことはできないと考えた。
- ⑦ この世の感覚的で個別的なものごとを、イデアとしての実在から切り離したプラトンのイデア論は、その弟子であるアリストテレスによって批判された。
- ⑧ 単なる社会的関係性を実体的存在と見なす「物象化」を批判したマルクスの観点は、アリストテレスがプラトンのイデア論を批判したことと無関係ではない。
- ⑨ 中世ラテン・キリスト教世界の科学史を研究したデユエムはアリストテレス主義にも通じており、自然科学における判定実験の意義と限界性を明確に指摘した。